

日蓮大聖人御書全集

さんろんしゅうごしよ

三論宗御書

新版
2152
ゝ
2153

さんろんしゅうごしよ

三論宗御書

さんろんしゅう

はじ

にほん

わた

さんじゅうよんだいすいこ

みよ

三論宗の始めて日本に渡りしは、三十四代推古の御宇

しろしめすじゅうねんみずのえいぬ

じゅうがつ

ひやくさい

そう

かんろく

わた

治 十年壬戌の十月、百済の僧・観勒これを渡す。

にほんぎ

たいし

でん

み

いぎな

さんじゅうななだい

日本記の太子の伝を見るに異義無し。ただし、三十七代と

るふ

はじ

のことは流布の始めなり。

てんだいしゅう

りつしゅう

わた

てんぴようしゅうほうろくねんきのえうま

天台宗・律宗の渡れることは、天平勝宝六年甲午

にがつじゅうろくにちひのとひつじ

ないししがつ

きよう

い

とうだいじ

い

二月十六日丁未、乃至四月に京に入り、東大寺に入る。

てんだいしかんとううんぬん

しよでん

おな

にんのうだいよんじゅうろくだいこうけん

天台止観等云々。諸伝これに同じ。人王第四十六代孝謙

てんのう

ぎよう

しようむ

ぎあやま

か

なお

天皇の御宇なり。聖武は、義謬りなり、書き直すべきか。

かいだん

まえ おな

戒壇は、もつて前に同じ。

だいにちきよう

にほん わた

こうぼう ゆいごん い

くだん

大日経の日本に渡れることは、弘法の遺告に云わく「件

きようおう

おおやまとのくにたけちのこおりくめのどうじよう

とうとう もと あ

の経王は大日本国高市郡久米道場の東塔の下に在り」

うんぬん

げんしようにてんのう ぎよう

云々。これまた元正天皇の御宇なり。

ほけきよう

わた はじ

にんのうだいさんじゅうよんだいすいこよねん

法華経の渡り始めしことは、人王第三十四代推古四年、

たいし

えじ ほつし い

ほけきよう なか

く

「太子、慧慈法師に謂つて曰わく『法華経の中、この句に

らくじ

うんぬん たいし つか かんど つか

いぜん

落字あり』と」云々。太子、使いを漢土に遣わすより已前に、

ほけきよう

くに あ すいち

きんめい ぎよう わた

法華経この国に有りしか。推知するに、欽明の御宇に渡る

きよう なか ほけきよう あ

ところの経の中に法華経有りしなり。

みずか　ごふしんあ　だいじ

にほんぎ　い

ただし、自ら御不審有る大事は、いわゆる日本記に云わ

きんめいてんのうじゅうさんねんみずのえさるふゆじゅうがつじゅうさんにちかのとり　ひやくさいこく

く「欽明天皇十三年壬申冬十月十三日辛酉、百済国

せいめいおう　はじ　こんどう　しやかぞういつく　けん　とううんぬん　ぜんこうじ

の聖明王、始めて金銅の釈迦像一軀を献ず」等云々。善光寺

るき　い　あみだ　かんのん　せいし　きんめいてんのう　みよ

流記に云わく「阿弥陀ならびに観音・勢至、欽明天皇の御宇

あめのしたしろしめすじゅうさんねんみずのえさるじゅうがつじゅうさんにちかのとり　ひやくさいこく

治天下十三年壬申十月十三日辛酉、百済国の

めいおう　くだん　ぶつぼさつちようだい　うんぬん　そうい

明王、件の仏菩薩頂戴す」云々。相違いかん。